

鳥種別生態と防除の概要：ヒヨドリ

鳥獣害研究室作成（藤岡担当）。

無断複写・転載をお断りします。研修資料等としてご利用の場合にもご一報ください。

Ver. 1.0（2001年8月8日）。

Ver. 2.1（2001年12月10日）。図表を入れ，文献情報は別ファイルに分ける。

1 一般的特徴

（1）分類・名前

・スズメ目ヒヨドリ科。

・学名 *Hypsipetes amaurotis*

・英名 Brown-eared Bulbul

ヒヨドリ科はアフリカを中心に分布するグループで，日本では他に沖縄地方にシロガシラが分布している。

（2）形態・行動の特徴

全長28cm，体重70～100g。だいたいムクドリと同じ大きさだが，尾が長く，頭がぼさぼさにみえる。全体に濃い灰色で，頬と脇が赤っぽい（写真1）。ムクドリより樹上で過ごすことが多い。波形を描いて飛ぶ。ホバリング（はばたいて一個所に止まる）もできる。大きな声で「ピーヨ，ピーヨ」「ピーッ，ピーッ」と鳴く。



写真1．こまつな畑で採餌するヒヨドリ

（2001/03/13 中央農研にて山口撮影）

（3）生息地・分布

日本列島から朝鮮半島南部の固有種。木のあるところなら市街地から山地のいたるところにいる。北日本や山岳地帯のものは，冬期に関東以南や平野部へ移動する。

（4）餌

昆虫類や樹木・草の果実，花や蜜，葉野菜など。甘いものを好む。繁殖期にも昆虫類だけでなく果実を食べ，雛にも給餌する。ムクドリも似たものを食べるが，ヒヨドリと違って花や蜜，野菜は食べないし，しよ糖を消化できないため，かんきつ類も食べない。

（5）繁殖

他の小鳥類よりも遅く，5月中旬頃から8月に林や公園，庭で繁殖する。樹上に枯れ草やビニールの紐で巣を作り，3～5個の卵を産む。抱卵は雌だけで，約14日でふ化し，雌雄で雛に餌を与えて約10日ほどで巣立つ。雛はその後数日間は親についてまわって餌をもらう。同じつがいでも年に2～3回繁殖することがある。

(6) 社会生活

一夫一妻。繁殖期には1羽か2羽で行動する。冬期には数羽から100羽以上が集まることがよくあるが、一時的な集まりで、寝るときはバラバラになる。春秋の渡りの時期には数十羽～数百羽の群れで移動する。

(7) 人との関わり

西日本ではかつては食べられていたようである。長らく保護鳥(非狩猟鳥)になっていたが、農業被害が増えているとして1994年(平成6年)から狩猟鳥に指定されている。環境省の統計によると、1998年(平成10年)には全国で696,802羽が狩猟により捕獲されている。関東以南のかんきつを栽培している県で捕獲数が多い。その他に有害鳥獣駆除で49,854羽が捕獲されている。なお、1998年はヒヨドリ被害の多い年(図1)で、捕獲数も多い。その前年の1997年には狩猟と駆除による捕獲数がそれぞれ186,117羽と32,116羽と、1998年よりずっと少なかった。

東京や名古屋では1970年代に入ってから都市部で繁殖するようになったといわれている。冬にエサ台に果物や食パン、ジュースなどを置くとよくやってくる。

2 被害の特徴

(1) 全般的傾向

農水省植物防疫課が全国の自治体を通して集計している被害統計によると、1999年(平成11年)の被害面積は6千4百ヘクタール、被害量は5千2百トン、被害金額は8億2千万円となっている。面積ではカラス、スズメ、カモ、ハトに次いで5位、量ではカラス、ハトに次いで3位、金額ではカラス、スズメ、ムクドリに次いで4位である。

ただし、ヒヨドリの被害程度は年によってかなり変動する(図1)。近年では1996～97年の冬に各地で被害が多発した。上の値は被害の比較的少なかった1999年のものなので、平均的にはカラスに次いで大きな損害をもたらしていると考えてよい。

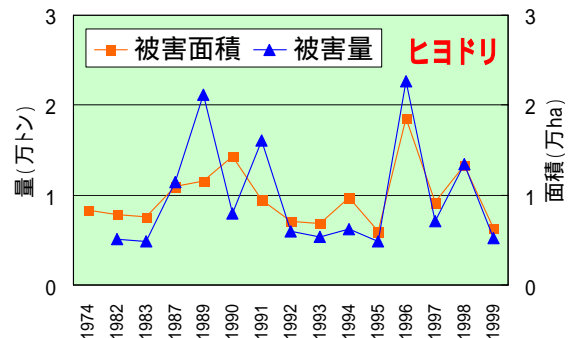


図1. ヒヨドリによる農作物被害の推移
(農水省植物防疫課統計による)

(2) 加害作物

ヒヨドリの被害は果樹と露地野菜で生じる(図2)。

あらゆる果樹が被害を受けるが、落葉果樹(なしやりんご、かきなど)よりもかんきつ類での被害が大きい。かんきつ類では、被害の有無は果皮の厚さ(硬さ)と熟期による。果皮の厚いもの(たとえば伊予柑)では被害は少なく、また1月～3月に熟する品種で被害が多い。未熟果実は食べない。糖度との

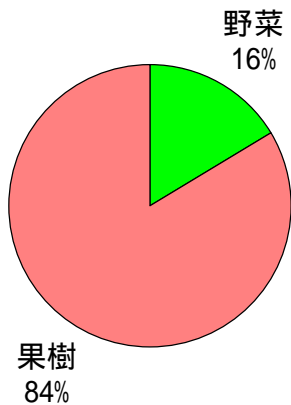


図2. ヒヨドリによる加害農作物の内訳
(重さ。農水省植物防疫課統計による。)

関連ははっきりしないが、現在栽培されている品種はすべてヒヨドリが好む糖度に達していると考えられる。

野菜では、アブラナ科の野菜でもっとも被害が多い。特にキャベツ、はくさい、ブロッコリー、こまつななどが好まれ、だいこんの嗜好性はやや落ちる。ほうれんそうやレタスも被害にあうが、アブラナ科の野菜よりは少ない。キャベツやはくさいではまず外葉がやられはじめ(写真2)、その後結球部の頂上がえぐられる

ように被害がひろがることが多い(写真3)。食痕によって昆虫類(鱗翅目幼虫やバッタ類など)による被害とは区別できる(写真4)。



写真2. 外葉をヒヨドリに食害されたキャベツ
(1997/2/14 群馬県にて藤岡撮影)



写真3. 結球部をヒヨドリに食害されたキャベツ
黒い固まりはヒヨドリのフン
(2001/2/15 愛知県渥美半島にて藤岡撮影)



写真4. これは昆虫によって食害されたキャベツ。
ヒヨドリによる食害と違って、食痕が丸みを帯びている。
ヒヨドリはくちばしでちぎりとったり、つついたりして食べるため、鋭角の三角形やちぎれた痕が残る(写真2, 3参照)。
(2001/2/15 愛知県渥美半にて藤岡撮影)

(3) 季節による違い

先に述べたように、北日本で繁殖したヒヨドリは南西日本へ渡って越冬するため、関東以西ではヒヨドリの個体数は10月～4月に多く、夏には少なくなる(図3)。被害は冬期に集中し、特に年末以降に多い。これは、野生の木や草、植栽された木になる果実が秋から次第になくなっていき、真冬から早春に餌が少ないためと考えられている。

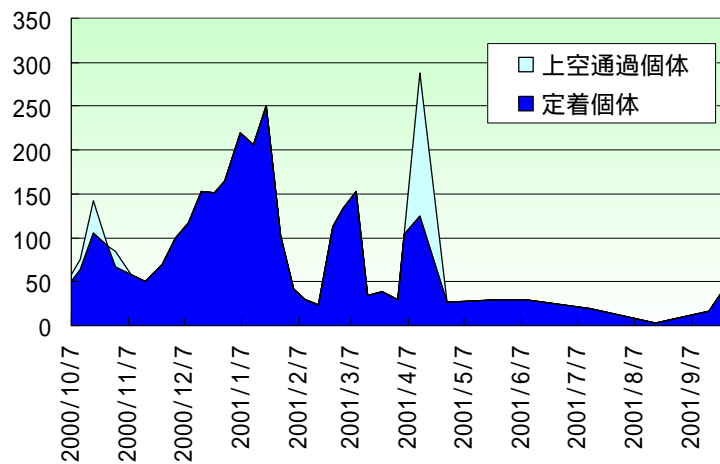


図3. 中央農研周辺におけるヒヨドリ個体数の変動

(山口, 未発表資料)

(4) 場所による違い

地域的には、かんきつ類へ栽培地である関東以南の温暖地と、関東地方をはじめとした露地野菜の産地で被害が多い。ヒヨドリの個体数との関係は不明である。

露地野菜での被害では、林に近いところから被害にあう。かんきつ類などの果樹でも隠れたり休んだりする林に近い場所の方が加害を受けやすい。

3 防除策

(1) 網か袋で保護するのが基本

ヒヨドリによる被害は長期間にわたることが多いので、ヒヨドリが作物に触れられないように物理的に保護する方法が基本になる。派手な模様や音声でヒヨドリを威嚇して追い払おうとする方が容易ではあるが、短期間しか効果がなく、結局は無駄に終わることが多い。

今のところ防鳥網しか確実な方法はない。網目は2～3cmのものを使い、防鳥網の上にヒヨドリが乗っても作物に届かないように高さを十分確保することが大切である(写真5,6)。なお、果樹や野菜のハウス栽培でもハウスの開口部を防鳥網で覆っておかないと侵入されることがある。傾斜地の果樹園などで防鳥網の設置が難しい場合には果実袋による保護を検討する(次の事例参照)。



写真5. 防鳥ネットで完璧に守られたキャベツ苗
(1999/1/22 茨城県にて藤岡撮影)



写真6. 防鳥ネット越しに食害されたキャベツ
(2001/2/15 愛知県渥美半島にて藤岡撮影)

ヒヨドリへの効果をうたった様々な防鳥機も市販されているが、すぐに慣れを生じる。防鳥テープやかかし類も効果は続かない。ヒヨドリの被害には大きな年変動があるので、被害の少ない年にはこうした方法でも多少は被害を減らせるかもしれないが、その場合にも、使用期間をできるだけ短くする。

今のところヒヨドリ対策に使える忌避剤はない。

狩猟鳥であり、被害も狩猟期間中に多いので、狩猟によって捕獲するののも一つの防除手段である。数を減らすほど捕獲するのは一般に難しいが、銃(散弾銃・空気銃)による威嚇効果は大きい。非狩猟期なら自治体と相談して有害鳥獣駆除も検討する。

なお、収穫後の残りものなどを放置するとヒヨドリを寄せてしまうことがあるので気をつける。逆に、くず野菜・くず果実の方にヒヨドリを誘導することも可能かもしれないが、今のところ実績はない。

(2) 事例

愛媛県果樹試験場では、1997～99年にさまざまな防除法について精力的に試験した(池内1999, 2000参照)。その結果では、ディストレスコールを利用した音声機器や磁石、木酢液などは効果がなく、ラゾーミサイルとフクロウ模型については被害が減ったものの、長期使用による慣れについてはさらに検討が必要である、とされている。紙製の果実袋では、赤や白の袋よりも青緑の袋で被害がずっと少なかったが、果皮の色つきがやや落ちる。紙製の5倍ほど高価であるが、サンテという布製の袋では被害はほとんど生じない。これは繰り返し使用できる。

4 参考文献

代表的なもののみ（入手の便を考えて内容の重複しているものも挙げた場合があります）。

池内 温 (1999) 鳥獣害対策の現場から(13) ヒヨドリ・カラス(愛媛県) 植物防疫 53:462-463.

池内 温 (2000) 果樹園における鳥害防止対策について. 今月の農業 2000年9月号:25-29.

松岡 茂 (1994) 防風林からの距離によるヒヨドリのキャベツ食害率の変異. 日本鳥学会誌 43:101-103.

中村 和雄・松岡 茂・小滝 豊美 (1987) ヒヨドリに対する二, 三の防除器具の追い払い効果. 関東東山病虫害研究会年報 34:201-203.

中村 和雄・土屋 雅利 (1900) Distress call によるヒヨドリのキウイフルーツ芽食害防止. 日本応用動物昆虫学会誌 44:27-33.

渡辺 幸夫 (1980) 梨の防鳥防止柵の架設. 今月の農業 1980年8月号:44-50.

安田 慶次 (1982) ヒヨドリによる野菜の被害. 植物防疫 36:60-63.

安延 義弘 (1979) 果樹の鳥害とその対策. 果実日本 34(11):34-39

安延 義弘 (1980) 梨栽培における鳥害の防止方法. 今月の農業 1980年6月号:90-95